読みの交流のための学習課題
－白秋「庭の一部」の表現分析に基づいて－

松本修・佐藤多佳子

0. はじめに

山元隆春（2005）は、「コミュニケーション行為としての文学教育で目指すのは、〈話し合い〉によって学習者のテクスト理解を〈情報駆動〉〈物語内容駆動〉のものから〈要点駆動〉のものへと展開させていくということである。」[1] と述べている。この〈情報駆動〉以下の概念は、ヴァイポンドとハント（1984）[2] の提示したものであり、〈要点駆動〉の読みが、読みの交流を可能にする鍵であることになる。ヴァイポンドとハントの言う要点駆動の読みは、「結束性方略（coherence strategies）、物語表層方略（narrative surface strategies）、及び交流方略（transactional strategies）によって特徴づけられる。」[3] ものであるとされている。テクストに対して一貫性の高い説明を与えようとする方略、物語の表層的な言葉の特徴に着目しようとする方略、作者（ただし実態ではなくアイデアルな作者）とのコミュニケーションを重視するテクストの外側からの能動的な読み手たろうとする方略という三つの要素によって基礎づけられる。

要点駆動の読みを特徴づける三つの方略の概念は、一面で、「叙述に即した読み」と物語表層方略、「一貫性のある読み」と結束性方略というように一般的な文学教材の読みの用語と近い。しかし、表現効果を読者の側からの働きかけの側面から分析し意味づけるという意味合いが強く、そのような表現効果に着目した読みを要点駆動の読みと言っている。

このうち、最も重要な方略は交流方略であるということになるが、この三つの方略を満たすような学習課題がなければ、読みの交流という学習活動が実質的な意味を持つコミュニケーション行為として成立しない可能性がある。では、どのような学習課題がこのような特徴を満たす方略となり得るのであろうか。この問題について、北原白秋の「庭の一部」という詩をとりあげ、その表現構造を分析しつつ、〈要点駆動〉に適していると思われる課題を例示して、その有効性について考察する。

1. 北原白秋の「庭の一部」のテクストと論争

本稿で用いる「庭の一部」のテクストは、岩波書店版『白秋全集 4』による [4]。次に示すものである。（ただし本論中での引用時はルビを用いない。）

庭の一部

さあ、朝飯（あさめし）だ。
真紅（まつか）な、ちらちらする、

コスモスの花が三(みつ)つと、
穂の出たばかりの小(ち)さい唐黍、
なんとこの庭の一部の
幽(かす)かな、新鮮な秋。
あ、郵便が来た。

この詩は、1922（大正 11）年 10 月『詩と音楽』1 巻 2 号に「芙蓉の季節」と題された 8 編の連作の中の一つとして発表された。穏やかな初秋の叙景詩群であるが、ある論争でとりあげられ、詩としての緊密さを欠いている散文的なものとして批判された。

その論争は、白秋が白鳥省吾の「森林帯」という詩を「芙蓉の季節」を掲載した同じ号の『詩と音楽』で批判したことから発したものである。その白秋の「考察の秋　その一」の「詩であるか」では、次のように述べられている[5]。

民衆派詩人中の随一と称される白鳥省吾君の「森林帯」は太陽九月号に載つたものである。

私は試みにこの詩の行列を廃し、句点を保存し、その儘世上の散文と称するもののやうに組み変へて見る。これは原作者に対しては非常に気の毒ではあるけれども、詩の道の為と思つて許していただきたい。

読者はまた、之をただ読み下して読んでいただきたい。さうしてこれがどうしても散文でない、詩である、自由詩である、と思はれるかどうか。詩としてのやむにやまれぬリズムのおのづからな流れがあるか、どうか。それを感覚的に当つていただきたい。

—中略—

また、リズムばかりでなく、その鑑照の密度、鋭鈍、詩境の高下、深浅、表現上の効果等につき、この詩が果たして真の自由詩であるか否か。自由詩としてまた如何なる程度のものであるか。また詩ではないものか。散文であるか。散文ならば如何なる種類の散文か。また詩ではなくとも散文としては全く優れているものか否か。否ならばどの程度のものか。

この詩は、白秋によれば「散文」になるくらいであり、かなり長いものである。冒頭だけを見ると次のようになっている。

萱や蕨の繁り合つてゐる
山を越え山を越え
一だんと高い山から望めば、
遠い麓の広土は
青たたみ数枚のやうに小さい、
哀傷を誘ふほどにも何と云ふ可愛らしい世界であらう。

白鳥省吾は、11 月号の『日本詩人』で反論する。「詩の内容と形式—北原白秋氏に—」と題し、「断片的な気分、感覚本位の白秋氏の最近の詩と比較して、また別種の詩の世界を展開してゐることを私は確認してゐる。」[6]と自作を擁護した。

その最近の詩の例としてあげられた一つが、「庭の一部」である。白鳥は、次のように述べている[7]。

これが、詩壇の巨匠と称せらるる白秋氏の詩の全部である。それで私はこの詩に就ては、白秋氏が『詩と音楽』で私

の詩に加へた言葉を付帯せしめて、そつくり返上したいと思ふ。

改行をなくせば、ただの散文ではないかということである。感覚的な描写だから、まさに何を書いてもいいようなものであるという判断が白鳥側にはあったと思われる。

ここではこの論争に深入りすることはしないが、白鳥は、「芙蓉の季節」連作の中でこの「庭の一部」が口語詩であり、しかも「さあ、朝飯だ。」で始まる卑近な話題を持っていることに着目した可能性がある。朝餉の食卓の向こうに見える庭の情景をただ書き連ねるのであれば、ただの散文に等しいということであろう。そして、末尾が「郵便」という偶然性を持つような材料になっていることもそうした判断を助けたと考えられる。しかも、注4に示したように、『詩と音楽』での初出形は「あ、郵便だ。」となっていて、『水墨集』掲載形「あ、郵便が来た。」よりも「来る」という動的な印象を欠いたものとなっている。白秋は白鳥省吾の批判を踏まえて、誤解のないようにこの最終行を直した可能性がある。

このテクストの成立と論争は、この詩が要点駆動の読みを可能にするポイントにかかわっており、この詩の読みの可能性を示したものと考えられる。

2.「庭の一部」の表現分析

テクストに即してこの詩の表現を分析する。

1 さあ、朝飯だ。
2 真紅な、ちらちらする、
3 コスモスの花が三つと、
4 穂の出たばかりの小さい唐黍、
5 なんとこの庭の一部の
6 幽かな、新鮮な秋。
7 あ、郵便が来た。

第1行、「さあ、朝飯だ。」で時・場の設定がなされている。「さあ、」という言葉、「だ」という文末表現によって、語り手主体がそこに発話の主体として現れている。第2行から第4行が「庭の一部」の情景である。コスモスの花と唐黍という庭にある植物が描写される。それは、花がわずかに三つ、「穂の出たばかり」の「小さい」唐黍という初秋の情景である。第5・第6行がその情景についての語り手主体からの思いの表出である。それは、「幽かな」「新鮮な」秋という言葉によって、初秋というだけではなく、穏やかながらすがすがしい新鮮な気分が提示されている。第7行では、その情景や、朝飯という時・場から離れたような、唐突な印象を与える「あ、郵便が来た。」という語り手主体の気づきの表明がなされる。第2行〜第4行の庭の一部の初秋の朝の情景について、第5行〜第6行でその情景についての思いが表出されるのを、第1行、第7行の語り手の表出が挟んでいる形である。そして、第1行の時・場の設定と、第7行の出来事は関わりがないように見えるという構造である。

「庭の一部」にある初秋の気配がコスモスの赤い花の色や唐黍のまだ薄緑の穂などの視覚的なイメージや庭の一部の細部をたどる視線の動きによって定着されており、そこに、第7行の表出がぶつかる形になっている。

この第７行については、萩原昌好ほかが、次のような形で、「破調」という説明をしている[8)]。

皆さんは、最後の「あ、郵便が来た。」という言葉をどのように受け取ったでしょうか。突然、内容と関係のない言葉に出会ってリズムも雰囲気もくずされるようです。しかし、この破調、意外性こそ作者が狙ったものなのです。

さわやかで新鮮な朝。かすかな秋を発見した喜び。こんなときには、何かよい事が起こりそうな予感がします。その期待感が郵便を連想させるのです。

解説者も「何かよい事が起こりそうな予感」が「郵便」を連想させると言うように、一見唐突なようでありながら「破調」とまでは言えない緊密な結びつきがある。この表現をどう読むかがおそらくこの詩の読みの重要なポイントである。

まず、表現の形式としては、第１行の「さあ、」「だ。」と第７行の「あ、」「来た。」という口語的な表現が対応しており、最初と最後の形式上の呼応によって、詩の構造上の枠組みは安定したものとなっている。

そして、内容的には、第２行から第６行の初秋の朝の庭の額縁の中の静的な情景とは異なる、動的な外からの訪れがもたらされており、視覚的な情景から郵便が来たことが自転車の音や「郵便」というような配達人の声などの聴覚的な情報に転換されることで、二重の転換がダイナミックにもたらされている。また、初秋の朝のささやかな期待感のようなものが、「あ、」という驚きとともに、「郵便」という外からやってくる何らかの新たな出会いや情報をもたらすものの訪れによって増幅されるという意味で、一貫性（山元の用語では結束性）も保たれている。

白秋が「あ、郵便だ。」を「あ、郵便が来た。」と改めたのは、極端な場合、郵便が置いてあるのに気づいたというような誤解を招かないようにということもあるかもしれないが、むしろ「外から郵便が来る」ということの持つ意味を強調したかったからではないかと思われる。

このように、「庭の一部」は形式的にも意味的にも緊密な構成をもっており、散文的な日記の一部のような文章ではないことがわかる。

3. 読みの交流のための学習課題

「庭の一部」のこうした表現上の特徴を生かし、「読みの交流」を促すような学習課題の一例として、次の課題を案出した。

課題：次の詩を読んで空欄を補充し、その理由を述べなさい。

庭の一部

さあ、朝飯だ。
真紅な、ちらちらする、
コスモスの花が三つと、
穂の出たばかりの小さい唐黍、
なんと、この庭の一部の
幽かな、新鮮な秋。
あ、［　　］

先の分析にあるように、詩の構成や意

味的な構造を分析的に考えながら補充すべき表現を考えさせる課題である。この課題は、次のような点で要点駆動の二つの要素をあらかじめ満たしている。

詩の空欄補充は、もともと緊密な結束性をその表現の前提として詩が成立していること、読み手側も限られたテクストの言葉を根拠として考えることになるため、結束性方略を満たしている。

また、そもそもテクストの表現にこだわって考えなければならないものであるため、形式面も含めた表層的特徴に着目せざるを得ず、物語表層方略を満たしている。

問題は、交流方略に関して、この空欄を補充した解答をめぐって、互いに理解可能な議論が可能であるか、ということである。

この点について検討するために、40名の小・中・高の現職教員にこの課題に解答させ、その検討・討議を行った。そこに出てきた解答と議論の一部を以下検討したい[9)]。

4. 読み手の反応と交流の可能性

実際に出た解答の一部をあげる。

a いわしが焼けた。
b 飯が炊けた。
c 箸がない。
d 赤とんぼだ。（秋あかねだ。：一例）
e 風の匂いが変わった。
f 朝焼けだ。
g 蟋蟀だ。
h 犬が来た。
i 新聞屋だ。
j 豆腐屋だ。
k もうこんな時間だ。
l 遅刻する。

解答例は議論を踏まえてカテゴライズしてある。検討されたことをまとめると次のようになる。

a から c は、第 1 行の「さあ、朝飯だ。」と意味的なつながりをもっている言葉を最終行に置こうとするもので、首尾の照応という全体構造に従ったものである。ただし、a・b は嗅覚・聴覚に視覚から転換を図ったと言うこともできる。また、c は、「あ、」という驚きを朝飯との一貫性の中で解決したとも言える。

d から g は秋の情景という第 3 行から第 6 行の内容とのつながりと転換という構造を考えているものである。

d は、第 3 行以降の表現と情景という一貫性を保つとともに、植物の静的な情景から動物の動的な情景に転換を図ったものであり、一貫性と転換の両方の要素によってダイナミックに閉じる構造を考えたものであろう。ちなみにこの解答は最も多く、14 名を数えた。

e は、同じく動きに転じながら、嗅覚に感覚を転じたものであり、二重の転換によってダイナミックに閉じるということを考えている。

f は庭という額縁の中の情景からより大きな情景、上方の空へ転じたものである。

g は、視覚的な情景から、聴覚へと転じたものであるが、秋という点において一貫性を保っている。

h から j は情景とのつながりではなく、そこからの転換によってちょっと意表をつく閉じ方を考えたものである。

h は、額縁の中の庭の情景に、外からの闖入者として犬が来るという動的な要素を導入し、転換によって閉じるという仕組みになっている。しかし、「犬」でなければならない必然性は認められない。

i は、聴覚への転換（配達の自転車の音や「新聞です」というような声）をも含んで、朝という時のつながり、外から何かがもたらされるという秋の訪れにふさわしい一貫性があり、かなりの条件を満たした表現である。

j は同様に聴覚への転換（ラッパの音や自転車の音）と朝という時のつながり、何かがやってくるという動的な変化という構造を持っている。また、朝飯という第 1 行との呼応関係も持っている。

k、l はいずれも朝という時とのつながりや、「あ、」という気づきないし驚きの表現とのつながりを持っているものの、それ以上の必然性はなく、どこか「機械仕掛けの神」[10] のように、とりあえず終わりにしてしまうというような性質を持つ表現となっている。

このようにしてみると、それぞれの解答が少なくとも何らかの根拠を持っており、互いに説明可能であり、理解可能であることがわかる。その意味では、この課題を巡っての学習者同士の交流は可能であると言える。学習者同士の交流が可能であるのは、テクストの外側から想定される作者ないし語り手の語る表現の必然性にかかわって課題とその答えが機能しているからで、交流方略の条件を満たしている。課題が交流方略の条件を満たしていることで、読み手同士の活動としての読みの交流が可能となる[11]。

要するに、この課題は、結束性方略（coherence strategies）、物語表層方略（narrative surface strategies）、及び交流方略（transactional strategies）という要点駆動の三つの方略を満たしたものと言うことができる。

5. 読みの交流のためのさらなる要件

松本修（2006）は、〈語り〉に着目した課題が読みの交流を可能にすることを次のように提示した[12]。

> 読みの交流を促進するには、テクストの表層的特徴に注目した交流の契機が必要であり、その重要な要因に「語り」の要素があること、またテクストのミクロ構造にかかわるものである方がより、話し合いを有効にするものであることが分かった。－中略－そのような部分テクストの特に描出表現にかかわるナレーションとしての語りにかかわる学習課題のもとで、内容的にも形式的にも活発な交流が行われることが確認できた。

要点駆動の三つの方略と重ならないものとして、「テクストのミクロ文脈にかかわること」がある。テクストの共有しにくいマクロ文脈や読み手の個別の経験などの共有されにくい状況の文脈に依存しない方が交流がやりやすい性質があるからである。この課題は、テクストが短い詩であることもあって、「ミクロ文脈にかかわる」という要件を満たしている。

また、「読みの多様性があること」も重要な要件である。解釈そのものは同じように見えても、読みの過程の違いは認め

られるものであるが、読み手同士の解釈結果そのものが異なる方が交流は活発化しやすい性質がある。そして、実際の解答に見るように、この課題はある程度「読みの多様性がある」という要件を満たしている。

以上の点から見ても、この課題が読みの交流のための学習課題として適したものであるということができる。

むしろ懸念されるのは、「読みの多様性」が過剰に保証されるのではないか、ということであろう。実際、一見すると、どんな言葉でも入る可能性があるように見える。しかし、既に解答例のいくつかを検討した中でわかるように、テクスト構造や部分テクストにおける一貫した説明を可能にするものが相対的な読みの優位性を持つという判断が読み手に共通してなされるという意味合いでの違いは認められるのであり、「赤とんぼだ」や「新聞屋だ」「豆腐屋だ」というような解答例が表現分析の中で一貫した説明を与えられる多くの条件を備えた表現であることは、互いに了解可能であった。

読みの多様性が保証されつつ、相互にその読みが理解可能であるためには、それぞれの読みが了解可能な根拠と理由付けによってその表現効果を分析的に説明される必要があるわけであり、その条件をより満たした読みが相対的に優位であることになる。ただし、その相対的優位性は読み手相互のコミュニケーションによって支えられるものである。

そして、「郵便が来た。」という白秋の表現の表現効果が高いものである点も説明可能である。

6.「郵便が来た。」の効果

朝飯のために卓袱台の前に座った語り手には「庭の一部」が見えている。その見えているコスモスや唐黍の情景が語られ、それを「幽かな、新鮮な秋」と捉える。そこに、「あ、」という感動詞が入ることによって何らかの転換がもたらされる。静謐さをたたえる情景の中に何らかの動きや、転換が示唆される。

「郵便が来た。」は、視覚から聴覚への転換（自転車の音や「郵便です」というような声）、郵便という外からもたらされる新たな情報、誘いへの期待が、すがすがしい初秋の朝の印象と一貫したイメージを形づくることになる。

このように考えると、「何でも入る」ようなものではないことがわかる。「豆腐屋が来た。」がいかにも「朝飯」に「付きすぎている」感じなのに対して、「郵便が来た。」は、穏やかな「離れ」を実現しており、朝飯との一貫性などより優れた、初秋の情景と気分の高揚というような意味での表現上の一貫性を実現したものだと言える。

「何でも入る」ようにこの課題が一見すると見えるというのは、白鳥がこの詩を日常を描いた散文だと考えたのと同じような立場からこの詩を見ているといえるかもしれない。

ただ、この課題は詩の表現の読みにある程度熟達した読み手でなければ難しいものである可能性はある。それは教材としての特性と学習者・学習者集団の特性とのすりあわせという現実的な条件という側面があることも示している[13)]。ようするに読みの交流を促すには、問いも

重要だが、それとの関係において、教材自体、テクスト自体にもそれなりの条件があるということも言えそうである。

今後、実際の学習者における読みを検討し、この課題の学習過程における可能性と問題点を検討する必要がある。

注

1)山元隆春(2005)p.663

2)Vipond,Douglas & Hunt,Russell A.(1984)

3)山元前掲書 pp.653-654。ここでは、coherence を結束性と訳している。これは、山元が cohesion ＝結束構造／coherence ＝結束性という訳語を採用しているからで、研究者によっては、cohesion ＝結束性／ coherence ＝一貫性ないし関連性という訳語を用いている。

4)北原白秋（1985a）pp.111-112。掲載形は、北原白秋『水墨集』アルス(1923)による。なお、この詩には次のようなバリアントがある。

・初出形（『白秋全集 4』p.310。初出誌は『詩と音楽』1 巻 2 号(1922)アルス）

さあ、朝飯だ。
真紅な、ちらちらする
コスモスの花が三つと、
穂の出たばかりの小さい唐黍、
なんと、この庭の一部の
幽かな、新鮮な秋。
あ、郵便だ。

・アルス版 『北原白秋詩集第三巻』(1930)

さあ、朝飯だ、
真紅な、ちらちらする
コスモスの花が三つと、
穂の出たばかりの小さい唐黍、
なんとこの庭の一部の
幽かな、新鮮な秋。
あ、郵便が来た。

5)北原白秋（1985b）pp.39-40。初出『詩と音楽』1 巻 2 号（1922)。なお、この論争については、「詩人・白鳥省吾を研究する会」のウェブサイトに白鳥側の立場から詳しく述べられている。http://ww5.et.tiki.ne.jp/~y-sato/kaiho26.htm

6)白鳥省吾(1922)p.85

7)白鳥　前掲書 p.89

8)萩原昌好編(1986)p.37。なお、この詩の解説者は特定できない。

9)2009 年 8 月 7 日、新潟県十日町市で実施された国語教育研修会における講話の中で演習形式で検討を行った。

10）デウス・エクス・マキナ (Deus ex machina) 古代ギリシアの演劇において、劇の内容が解決困難な局面になった時、突然絶対的な力を持つ神がクレーンのような機械仕掛けで現れ、解決を下して物語を収束させるという手法。

11）なお、もともと二つの交流は transaction と interaction という別の用語に由来しており、訳では同一であるが、その意味合いを異にしている。

12)松本　修(2006)p.106

13)ある程度の表現分析への慣れが必要と考えられるので、学習者としては中学生程度を想定する。ただ、学習者の文学教材についての学習歴に左右される面は大きい。

参考文献

北原白秋（1985a）『白秋全集 4』岩波書店
北原白秋（1985b）「考察の秋　その一 詩であるか」『白秋全集 18・詩文評論 4』岩波書店
白鳥省吾（1922）「詩の内容と形式―北原白秋氏に―」「一、詩と散文」『日本詩人』11 月号
萩原昌好編（1986）『少年少女のための日本名詩選集 2』あすなろ書房
松本　修（2006）『文学の読みとその交流のナラトロジー』東洋館出版社
山元隆春（2005）『文学教育基礎論の構築』渓水社
Vipond,Douglas & Hunt,Russell A.（1984）"Point-Driven Understanding: Pragmatic and Cognitive Dimensions of Literary Reading ",*Poetics,13*

付記

本論文は、「読みの交流を促す学習課題の作成」という大学院講義における課題に対する佐藤のレポートをもとに、佐藤と松本の全体にわたる協議に基づいて執筆されたものである。

松本　修（上越教育大学教職大学院）
佐藤　多佳子（上越市立春日小学校）

◇表現研究関係文献紹介

坪本篤朗他（編）『「内」と「外」の言語学』（開拓社、平成 21 年 9 月刊、￥5,460 円）

【本書の内容】として「この論文集は、「内」と「外」の概念を鍵語として、12 名の執筆者が多様な観点から「内」と「外」に関連するテーマを論じたものである。全体を通して、事態把握の仕方に対する、日本語と特に英語との類似性や相違点を明らかにすることが共通の眼目となっている。認知言語学、日本語学、生成文法、機能的構文論等で取り上げられてきた問題に対して、新たな視座からアプローチすることによって文法研究のおもしろさを伝える。」と簡潔に自著紹介している。

収められている論文は以下の通り、特に「視点」「人称」が重要なキーワードになっていて、表現研究にとっても見逃せない論文集である。

「日本語の尊敬構文と内・外の視点」（益岡隆志）、「参与者の概念拡張と比較文形成」（岡田禎之）、「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」（早瀬尚子）、「直示的視点と小説に現れた再帰代名詞「自分」の解釈をめぐって」（澤田治美）、「話者指示性と視点と対比―英語再帰代名詞の意味拡張の仕組み」（廣瀬幸生）、「人称と活格類型―上代日本語の代名詞体系の観点から」（柳田優子）、「視点の混在と小説の語り―自由間接話法の問題をめぐって」（山口治彦）、「「内」の視点・「外」の視点と時制現象」（和田尚明）、「〈存在〉の達成と〈部分〉／〈全体〉のスキーマー「内」と「外」の〈あいだ〉」（坪本篤朗）、「認知モードの射程」（中村芳久）、「他者理解における「内」と「外」」（本多啓）　（糸井通浩）